新課程における漢文の問題点

阿武慎治

I　提案

1　現状認識

教職について十五年の年数が経過した。最近、特にここ二、三年、授業を通して感じるのは、様々な要素を持って国語（特に漢文）に関する状況が変化してきているということである。ここでは、原因を明らかにするということを含めて、平凡な一教師の目で見た漢文についての現状をまとめてみたい。

○漢文軽視（離れ）の傾向が見られる。

生徒の言語離れが語られて久しいが、特に漢文・漢語離れは最近急速に加速しているようである。これは、生徒に限ったことではなく、我々教師においても顕著である。理由としては、第一に、日々使われている用語の中の漢語・漢文的表現の比重が減ってきたことによる価値・興味低下があげられる。次に、関連することだが、視覚的なコミュニケーション中心の環境の中で発達することで言語感覚が未成熟となり、特に漢語的言語表現理解にいたらず関心が持てないことがある。第三に、生徒の当面の目的である大学入試において、センター試験を除いて漢文の比重が軽くなってきていることなどが考えられる。特に、現在の作文教育においての小論文入試の与えた影響を考えると、第三の理由は教育現場においては教師を中心に漢文教育に関してかなりのウエイトがあるように思える。

○週五日制に伴う単位数減（時間数減）の影響が大きい。

平成七年度から実施された週五日制により、各教科で土曜日分総計四単位の減が行われた。それについて近辺の高校の動向によると、三年生での単位減は文系・理系に分かれるためにほとんどないが、生活一般が導入される基礎・基本の確立に重要な一年生、特に二年生で影響を受けている。このために、読み（音読・暗唱）や視聴覚教材・投げ込み教材が扱いにくくなり、学力や興味付けの面で問題が多く投げかけられている。実際授業を行ってみて、余裕がなくなり単調な授業になりがちになっていることは確かで

ある。

○古典Ⅰ・Ⅱ導入により、教材選択が以前より必要となる。

平成七年度より古典Ⅰが導入され、八年度に古典Ⅱが始まり、新課程の全貌が明らかになった。内容としては、特に古典Ⅰは国語Ⅱと比べ、教材が豊富で変化が増したが、難易度からするとやや難化しているようである。生徒の学力を踏まえた授業ということと、特に前述した単位数との関連で、教科書にあるすべての教材を授業において扱うということが難しいということで、教師自身の教材を精選する目を養う必要が増している。

○教材、教師が硬直化している。

新課程の導入により「国語」そのものの科目の名前は変更されたものの、教科書の体裁・教材の扱い等は以前のものとほとんど同じである。現代文では新たな教材がかなり取り入れられたが(善し悪しは別にして)、古典では新たな視点で取り入れられたものはない。そのためか他教科と比べて国語科の教師が最も変わろうとしていないように思う。

以上、最近の問題点を中心とした認識を述べてきたが、今感じている中心は、ただ入試やテストのために教師が機械的に漢文を教え、意欲のない生徒が機械的に聞き取るという双方の受動的な姿で、それが当然であるという漢文をめぐる(軽視の)雰囲気である。

2　工夫

現状認識を踏まえた上での提案の中心は、漢文についての価値の見直しである。従来漢文学習の目的は、漢字・漢語またその口調の理解、日本文学との関係の理解、古典としての鑑賞などがあげられた。しかし、認識の最初に述べたように、現代の高校生の意識から漢文そのものが離れつつある。生徒に確実な漢文の意識付けの点で、今後高校の授業における教科の中に、そして国語の科目の中で意味を持つために、従来の価値を明確にするとともに新たな価値を明確に示す必要がある。端的な言い方ではあるが、価値を示すことにより、この意義がある漢文の生き残りを考えなければいけない時代が来るように思える。漢文の価値を十分認めている者として、何とか(選択科目になることを阻止するためにも)新たな価値を付加するために、以下のことを提案するものである。

○文学教材としての価値を明確にする。

・現代文との関連を深める。

以前授業で「史記」(四面楚歌)の学習後、司馬遼太郎の「項羽と劉邦」の該当個所を一部プリントし生徒に読ませた。意図は作品本文の行間を読み膨らませることによって、言葉と想像力、また時代考察のすばらしさを味わわせるということである。授業では行わなかったが、逆に史話などを生徒自身に小説化させてみるのも面白いと思われる。漢字の羅列である漢文の行間・字間を埋める作業は、生徒にある程度の読解力があり、また興味づけがなされているならば、作文の学習として現代文で行われているものと違っ

たアプローチで効果を持つものであると考える。

・熟語など言語事項の指導を重視する。

漢字の現代における重要性は、若干低下したとはいえまだまだ大きいものがある。生徒に漢文を単なる英語と同じような異文化の文章と思わせないためにも、それぞれの漢字に当たらせて、意思伝達の手段の記号として重要な効果を持つ価値を読みとらせたい。以前、実業高校に勤務していたときは、漢和辞典を中心に漢文の授業を行っていた。特に、漢字の成立（六書）を詳しくすることにより扁やつくりの意味、ひいては不明な漢字も形からある程度の判断が下せるようになり、表意文字としての漢字が明らかにできたように思える。

・郷土の日本漢文の発掘を試みる。

興味付けの一つとして、また課題として扱うことで自己教育の一環として古文では多くなされている。漢文では作品の数が少ないのと、日本漢文がやや難解であることからあまりなされていない。以前、山口県下関市で勤務しているときに、三年生に投げ込みで、山口県出身の月性の「将東遊題壁」、高杉晋作「絶句」、また下関に立ち寄ったときの広瀬淡窓の「赤馬関雑詩」を示したことがある。受験の関係で詳しく扱うことがでず、授業者からの一方的な紹介であったが、一応は興味が喚起できたようであった。扱いは単なる投げ込み教材にすべきであるのは当然であるが、授業法についてはグループ学習を含め検討する点は多いと思われる。しかし、地元を詠ったものであるので、興味付けの点と、歴史的な事項に触れる関連で社会科との繋がりも広がり、新たな授業の展開が期待される。

○音声言語教材としての価値を明確にする。

・暗唱を大切にする。

授業時数の関係で、現代文・古文においても基礎・基本に関する内容に触れにくくなっている状況で、大切な音読をどのように取り入れていくかは現場における大きな問題である。その点、漢文は唐詩を中心として短く覚えやすくリズムのあるものが多いために、音読教材、特に暗唱教材としての価値が高いように思える。冊子としての暗唱文集を作って定期的にそれを覚えさせるのも効果があるのではないか。また、百人一首に模した、絶句カルタや対句カルタ（市販品もある）を作らせ、楽しみながら自然に触れさせ、音読に慣れさせるのも効果が考えられる。

・ディーベートに利用する。

最近、指導要領の新たな内容に沿って、「話す」という音声言語指導が重視されるようになった。特に、ディーベートという形で意見を述べさせる発表が多くなされている。ただ、この形式は、自分の意見をどちらかにおいて競うために、国語の現代文・古文などにおいては適していない。漢文については、たとえば「韓非子」などは論旨が明確であり、賛成・反対の意見が持ちやすく、また、現代の政治につながる面が大いにあり非常に適した教材ではないか。

できればＬＨＲとの関連で行いたい。
○異文化理解教材としての価値を明確にする。
・地歴科との連携を深める。
日本と特に関係が深い中国の文化に触れるために、歴史との関係は避けて通れない。例えば、世界史で春秋戦国時代や漢代を学習する時に、漢文も「史記」などを学習するというように、関連させながら授業を進めると生徒の興味づけにも効果があるのではないか。また、日本史においても古文を中心に資料読みとりがあるが、国語の授業も何らかの形で関係することにより広がりが出てくるのではないかと思う。

II　協　議

1　協議内容・反省

他の提案者との関連で、様々な協議、意見交換が行われた。この漠然とした提案で論点が明確にならない中、何人かの先生に、時間数減での対策についての工夫をお教えいただき、大いに参考にさせていただいた。カルタを通しての授業において生徒を主体的に取り組ませるためのポイントや、総合的な授業編成のあり方など、新たな視点を示していただいたことを、さらに今後、授業の中で取り入れ実践の中で深めていきたい。

2　問題点

研究協議を通して、以下のような問題点を課題として考えている。
○新課程の中で古典Ｉ・IIにおいて多く見られるようになった、日本漢文の価値をどのように位置づければよいのか。
教科書に示されている日本漢文はほとんど江戸期に書かれたものであるが、文学的意義はいかほどなのか、思想的背景は何なのかが、勉強不足もあり明確にわからず価値を見いだせないままである。
○評価問題をどう見直せばよいのか。
最も大きな問題であり、現在ジレンマに苦しんでいる問題である。授業において生徒に主体的に活動するように工夫したり、興味付けを考えても、評価問題が変わらなければ、生徒の漢文に対する思い・取り組みは変わらない。さらに端的な言い方をすると、大学入試そのものが変わらなければ、ある面で漢文の授業そのものは現状維持のまま流れて行くのではないかと考える。訓読・口語訳中心の評価問題が、教師の生き生きとした授業をあきらめた姿を、また生徒の授業に対する取り組みを表している。打開のための検討が必要な時期に来ていると考える。
※発表時の資料については割愛させていただきました。

（山口県立山口高等学校）